

エルンスト・ユンガーの美と政治  
——『労働者』における審美的テクノロジーによる全体的世界観をめぐって——

教育科学専攻 人文・社会系教育領域

中村恵太

2024 年 2 月 9 日（金）提出

## 目次

はじめに	1 - 4 頁
第一章 ユンガーにおける全体的世界観	5 - 15 頁
第一節 全体的世界観の系譜	5 - 9 頁
第二節 形態と全体と部分	9 - 15 頁
第二章 『労働者』における審美的テクノロジー	16 - 21 頁
第一節 ユンガーにおける美	16 - 19 頁
第二節 ユンガーにおけるテクノロジー	19 - 21 頁
第三章 労働国家における美と政治	22 - 28 頁
第一節 労働国家へと至る道	22 - 25 頁
第二節 全体的世界観としての労働国家	25 - 28 頁
おわりに	29・30 頁
参考文献	

## はじめに

本稿はエルンスト・ユンガー（Ernst Jünger, 1895 - 1998）の主著である『労働者』（*"Der Arbeiter"*, 1932）の提示した世界観を明らかにすることを通して、美と政治の関係性についての新たな可能性を探究することが主題である。

エルンスト・ユンガーは 1895 年に生まれ 1998 年に死去した。このユンガーが生きた約 100 年間にわたるドイツはまさに激動の時代であったと言える。二度にわたる世界大戦の勃発、そして敗戦。世界一の民主国家と目されたヴァイマル共和国の成立からナチズムの台頭、そして戦後の再統一へ。かかる激動の一世紀を作家として生き抜き、それぞれの時代に対してペンをもって応答してきた人物こそがエルンスト・ユンガーなのである。

ところで、ユンガーの主著である『労働者』は、1932 年に著された。ヒトラー率いるナチズム（Nationalsozialismus）が政権を獲得するわずか一年前の出来事である。当時のドイツは大混乱のさなかにあったといえる。ヴァイマル共和国は、当時としてはもっともリベラルでデモクラティックな憲法を有していた。しかしながら、決してその基盤は盤石と呼べるものではなかった。例えば、第一次世界大戦の前線を戦い抜いた前線世代の人びとはヴァイマル共和国による安定を、むしろ真の革命を阻害していると論難した。彼らにとって、あるべき社会は決してリベラルな社会体制ではなく、「戦争状態の日常化」によって達成されるものだったのである<sup>1</sup>。このような前線世代による保守革命の動きのなかで、プロパガンダを駆使することで大衆に対して大きな影響力を持つようになったのがナチズムである。

このように理性的主体にもとづく市民社会を一見すると体現したヴァイマル共和国に対して、血統にもとづく神話をもとに全体主義国家を建設しようと企図したナチズムが台頭していた<sup>2</sup>。これら両者の政治秩序は、全体と部分の関係性という視点において対照的なものであると言える。ヴァイマル共和国は、ホッブズ以来の社会契約論を前提としたリベラルな社会秩序である<sup>3</sup>。この秩序においては、バラバラな個々人

---

<sup>1</sup> 脇圭平『知識人と政治』、岩波新書、1973 年、104 - 119 頁。

<sup>2</sup> 当時の思想的状況については、ゾントハイマー『ワイマル共和国の政治思想』、河島幸夫・脇圭平訳、ミネルヴァ書房、1976 年。およびハーフ『保守革命とモダニズム』、中村幹雄・谷口健治・姫岡とし子訳、岩波書店、2010 年。を参照。

<sup>3</sup> ホッブズは政治的共同体について以下のように定義している。「政治的共同体とは『一つの人格であって、多くの人々から成る群衆が各人相互の契約によって、各人をその人格の諸行為の本人とした。それは、その人格が、彼らの平和と共同の防衛とに

が社会契約によって、より上位の権力装置である国家に自然権の一部を譲渡したという仮説によって、その正統性が担保される。かかる秩序において国家は、部分すなわち個人の総和として構想されるのである。他方で、ナチズムにおいては、個人は重要な意味を持たず、あくまでもゲルマン人という血統に基づいた国家に個人は吸収されてしまう。すなわち、個人という部分はゲルマン人国家という全体に包含されてしまうのである。

かかる国家像は、両者ともに問題性を有する。ヴァイマル共和国においては、市民が理性的主体として自らが自らを完成させるという宿命に陥る。なぜなら、部分としての個人は、個人を超える何かに自らの生きる意義を見出すことができないからである。その結果、市民社会において人々は、個々人がバラバラに分解されてしまい、これらの人びとを結び付ける精神的紐帯が失われてしまう。すなわち、ヴァイマル共和国という市民社会は、ニヒリズムに陥ってしまうのである。このような状況をユンガーは「全体性の喪失」とみなし非難するのである。他方で、ナチズムにおいては、個人はその主体性を喪失し、独裁者の命令を至上命題だとみなすこととなる。かかる国家において、個人はもはやその人間性を奪われ、国家という巨大装置の部品として機能するのみの存在とみなされることになるのである。

このように部分の総和としてのヴァイマル共和国、全体に部分が包含されてしまうナチズムという二つの国家像がせめぎ合っているという状況下において、ユンガーは『労働者』を執筆した。このような状況を勘案するならば、この著書には、ヴァイマル共和国のような市民社会にもとづく国家像でもなければ、ナチズムのような神話による全体主義にもとづく国家像でもない新たな第三の可能性としての国家像が提示されていると考えることができるのではないだろうか。そうであるならば、この国家像はまったく新たな世界観をもとに提示されていると考えなければならない。なぜならば、国家像とは、そのもとで生きる人間を無視しては構想することはできない。ヴァイマル共和国においては、理性的主体としての市民。ナチズムにおいては神話にもとづくゲルマン人。そこでユンガーは、『労働者』において新たな人間として「類型としての労働者」を持ち出すのである。すなわち、ユンガーは、ヴァイマル共和国やナチズムに対して、たんにその表層的な国家のシステムという視点からではなく、より根源的である世界観という次元から批判していたということができるのである。

では、ユンガーは『労働者』においていかなる人間像そして世界観を提示しているのだろうか。『労働者』は一読するだけでは理解することが非常に困難な書物であ

---

好都合だと考えるところに従ってすべての人々の強さと手段とを用いえるという目的のためである』ということになる。」(ホップズ『リヴァイアサン【上】』、加藤節訳、ちくま学芸文庫、2022年、276頁)

る。ユンガー自身は『労働者』において、この書物の執筆意図を幾度となく繰り返している。例えば、本書の企図をユンガーは『労働者』の冒頭において、

本書の企図は、理論を越え、党派対立を超え、予断を超えて、労働者の形態（Die Gestalt des Arbeiters）を、すでに歴史に力強く食い込み、変化した世界の諸々の形を有無を言わせぬ仕方で規定しつつある活動的な力として（als eine wirkende Größe）、目に見えるようにすること（sichtbar zu machen）にある<sup>4</sup>。

と説明している。しかしながら、果たして「労働者の形態」を「目に見えるようにすること」とはいったいいかなる事態を意味しているのか。さらに、どのような点において「労働者の形態」は、理論、党派対立、予断を超えているのだろうか。このように、『労働者』は、その冒頭から多くの謎を提示している。実際、未だこの書物に関して定まった解釈は存在しない<sup>5</sup>。そのような混乱を招いている要因は、この書物が読者に対して、読者自身の世界観の転換を迫るという点に存する。ユンガーは本書において、市民社会の時代と新たに到来する時代という「二つの時代を区別するものは、価値の高低でなく、むしろ別種性そのもの（die Andersartigkeit schlechthin）である<sup>6</sup>」と述べている。

したがって、『労働者』を解釈するためには、そもそも読む人間の思考を転換する必要がある。すなわち、現代の市民社会に生きるわれわれが当然とみなす価値観・世界観とはまったく異なる視点から読解することによってのみ、この書物の意義は明らか

---

<sup>4</sup> Ernst Jünger, *Der Arbeiter*, Bd10, Klett-Cotta, 2010, S.13.（エルンスト・ユンガー『労働者』、川合全弘訳、月曜社、2013年、8頁。）

<sup>5</sup> Matthiasu Schöning (Hg.), *Ernst Jünger-Handbuch. Leben-Werk-Wirkung*. Stuttgart, Weimar, 2014, S. 105-116. および川野正嗣「エルンスト・ユンガー『労働者』における『別の信仰』——戦士と信仰者の共同体——」、『社会システム研究』、21巻、2018年、81 - 101頁。および川合全弘「エルンスト・ユンガーの『労働者』——戦死者追悼論の視点から」、『世界問題研究所紀要』、28巻、2013年、227 - 240頁。を参照。具体的な解釈の例としては1、歴史哲学的・黙示録としての『労働者』、2、「労働者の形態」という形而上学の本としての『労働者』、3、政治的マニフェストとしての『労働者』、4、「総動員」概念を中心に社会理論や技術論としての『労働者』、5、芸術論的視点からとらえた『労働者』、6、文学と政治が結びついた美的エッセイとしての『労働者』、7、戦死者への追悼としての『労働者』などがあげられる。本稿では、形態に着目しつつ、テクノロジーと美との結びつきからユンガーの全体的世界観を考察するという点において、上記の2、4、5の観点を引き継ぎつつ発展させた内容だと言える。

<sup>6</sup> Ernst Jünger, op.cit., S.87.（エルンスト・ユンガー、同上、106頁。）

となるのである。そのような視点を本稿では「全体的世界観」と呼び、『労働者』が全体的世界観という視点によってこそ把握できる書物であることを明らかにしていく。さらにこのような読解を通して、現代においては自明視されている、政治の在り方を相対化することが可能となるのではないかと考えられる。なぜならば、現代において政治は、リベラルな政治体制が主流となっており、全体主義国家は危険思想であるとされ一顧だに値しないとみなされている。しかしながら、『労働者』においてユンガーは、認識論の次元から、新たな世界観を提示することによって、これら両者の社会秩序を批判しつ、全体主義的国家像を提示するのである。

本稿の構成は以下の通りである。まず第一章において、ユンガーにおける全体的世界観がどのような特徴を有するのかを検討する。具体的には、まず全体的世界観とはいかなる世界観であるのかを確認したうえで、ユンガー以前において全体的世界観を展開した思想家としてライプニッツとゲーテの世界観を検討する。そのうえで、ユンガーにおける全体的世界観を両者の世界観と比較することにより、ユンガーの全体的世界観の特異性を浮き彫りにしていく。第二章では、前章で確認したユンガーの全体的世界観の内実をより明確にするために、『労働者』における美とテクノロジーに着目する。第三章では、『労働者』において展開されたユンガーの国家論である「労働国家」について、審美的テクノロジーによる全体的世界観という観点から検討していく。そして最後に、以上の考察により明らかとなった『労働者』の世界観がいかなる現代的意義を有するのかについて検討していく。

## 第一章 ユンガーにおける全体的世界観

本章では、『労働者』の分析へと移る前の予備的考察として、全体的世界観とはいったいいかなる世界の見方であるのかを明らかにしたうえで、その世界観が思想史においてどのように展開されてきたのかを検討する。具体的には、まずユンガー自身が自らの形態を説明するにあたって言及している<sup>7</sup>ライプニッツおよびゲーテにおける全体的世界観を考察し、両者において全体と部分の関係性がどのようなものであるかを明らかにする。さらに、ユンガーにおける形態概念がいったい何を意味するのかを検討し、ユンガーの全体的世界観の特徴を浮き彫りにしていく。これらの考察を通して、ユンガーにおける全体的世界観がライプニッツおよびゲーテと共通点と相違点を有しており、ユンガーの全体的世界観が、形態としての労働者という観点において特異な世界観であることを明らかにしていく。

### 第一節 全体的世界観の系譜

そもそも全体的世界観とはいかなる世界観であるのか。端的に言うならば、それは全体と部分が相互作用することで世界は成立しているという見方である。例えばバラの例を考えてみよう。近代的科学による分析的思考にもとづくなれば、バラは各構成部分（例えば花や葉、茎など）によって構成されているとされ、他の植物との相違が明らかにされる。しかしながら、たしかにこのような見方によって一般的なバラの特徴は知ることができるとしても、この分析的思考において決定的に見すごされている点がある。それは、ある特定のバラ、今・目の前にあるバラは常に生成変化し続けているという点である。したがって、抽象的に植物を理解するという方法によっては、決して、今・ここにあるバラを把握することはできないのである。全体的世界観とは、このような分析によって分解された部分の合成によって世界が成立しているとする見方と対をなすものである。全体的世界観においては、世界は決して単なる部分の寄せ集めとみなされない。さらに、部分は全体に包含されるものでもない。全体的世界観において、世界は部分と全体が相互作用しつつ常に生成変化しているとみなされるのである。すなわち、全体は部分なくしてありえず、同時に、部分も全体なくしてはありえないとする見方である。このような世界観においては、部分と全体は切り離すことはできず、たえず双方向に影響を及ぼし続けるとみなされるのである。

このような世界観を独自の視点から探求した哲学者として、ライプニッツ（Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716）があげられる。ドイツの哲学者・カッシーラー（Ernst

---

<sup>7</sup> 「形態とはプラトンのイデアよりもライプニッツのモナドに、ヘーゲルの総合よりもゲーテの現植物に近い。」（Ernst Jünger, *Maxim Minima*, Bd.10, S. 390.）

Cassirer, 1874-1945) は、「ライプニッツ哲学と共に新しい精神の勢力が出現した」と評価し、その哲学によって「思考一般の新しい形式と新しい基本方向が出現した<sup>8)</sup>」と指摘している。この新しい形式および新しい基本方向こそが全体的世界観なのである。

ライプニッツは、『モナトロジー』において、世界はそれ以上分割不可能な最小単位であるモナドから構成されていると主張した。そして、モナドの相互作用によって世界は生成変化していると主張したのである。モナドとは、集合体としての実体を構成する部分であり、モナドそれ自身は部分を持たない。したがって、「拡がり〔延長〕も、形も、可分性」もない「自然の真の原子<sup>9)</sup>」である。ただし、ここで注意しなければならないのは、世界は決してたんなるモナドの集合体ではないという点である。ライプニッツは、モナドについて「一なるもの、すなわち単純なもののなかに、多を含んでいる<sup>10)</sup>」と述べている。すなわち、モナドとは、一であり多でもあるのである。より精確に述べるならば、「モナドには単一性か多数性かという二者択一は存在せず、両者の内的な相互関係、両者の必然的な相関関係のみが存在する<sup>11)</sup>」と言えるのである。

では、具体的にモナドのどのような性質によって、この一と多の相互関係は成立しているのだろうか。この点に関して重要な点は、モナドが静止した単なる物体では決してなく、動態として機能するという点である。モナドとは、「算術的な、すなわち数的な単位ではなく、動力学的な単位」なのである。つまり、モナドは自然的変化の原因を内的原理として有しており、その能動的作用によって世界を構成するのである。このような性質にもとづくならば、世界は決して静態的に理解することはできない。あくまでその移行の様子を把握するにとどまるのである。

さらにモナドは、それ自体として宇宙全体を映す鏡である。ライプニッツは次のように述べている。「すべてのモナドは己のやり方で宇宙を映す鏡であり、宇宙は完全な秩序に整えられているから、それを表現するもののなかにも、言い換えれば魂の表象のなかにも、したがって魂が宇宙を表現するときに対応する身体のなかにも、秩序があるにちがいない<sup>12)</sup>。」この引用において特に重要であるのは、すべてのモナドが「己のやり方で」宇宙を表現するという点である。すなわち、それぞれのモナドが部分として自らの内的原理を発揮することによって多様性が創出される。そして、この多様性が十分に豊富になることによって世界という全体の秩序が形成されるのである。か

---

<sup>8)</sup> カッシーラー『啓蒙主義の哲学』、中野好之訳、ちくま学芸文庫、2003 年、61 頁。

<sup>9)</sup> ライプニッツ『モナトロジー』、谷川多佳子・岡部英男訳、岩波文庫、2019 年、13 頁。

<sup>10)</sup> ライプニッツ、同上、19 頁。

<sup>11)</sup> カッシーラー、同上、66。

<sup>12)</sup> ライプニッツ、同上、56 頁。



かる全体と部分の関係性についてライプニッツは身近な例をあげつつ次のように説明している。

物質の各部分は、植物や一面に生えている庭や、魚がいっぱいいる池のようなものと考えることができる。とはいえ、その植物の枝や、動物の肢体や、その体液やのしずくの一つ一つが、やはりそのような庭であり、池なのである<sup>13</sup>。

常識的な見方からすれば、庭に生えている植物と庭はまったく別の物質であり空間だと考えられるかもしれない。しかし、ライプニッツの世界観においては、けっして植物と庭とを分離して把握することはできない。庭という全体と植物という部分は互いに相互作用することによって成立しているのである。

このような動的な世界の把握のための条件としてライプニッツは、充足理由の原理を提示する。充足理由の原理とは、思考の二つの原理の一つである。人間は、まず矛盾の原理によって対象の真偽を判断する。つまり、ある事象が矛盾している場合は偽と判断し、偽と矛盾する場合は真とみなす。さらに、人間は、充足理由の原理によって判断を行う。すなわち、ある事象に対して、その事象が「なぜこうであってそれ以外ではないのかという十分な理由<sup>14</sup>」の有無をもとに真偽の判断を行う。この充足理由の原理にもとづいて、物理学は原因と結果の連関を体系として築き上げるのである。このようなライプニッツの世界観についてカッシーラーは、

この新しい一般的な見方のなかで、全体という概念がこれまでとは異なるいっそう深い意味を獲得したということは直ちに明らかとなる。なぜならば把握されるべきまとまった「全体性」は、もはや構成部分の単なる総和に還元されてそれに尽くされるものではないからである。この新しい全体性は、「機械的」でなく「有機的」なものとして現れる<sup>15</sup>。

と述べている。このように、ライプニッツ哲学によって、全体的世界観が初めて確立されたのである。かかる全体的世界観においては、力としてのモナドがその内的原理を発揮することによってはじめて世界が構成されると同時に、モナドは世界全体を包含する存在でもある。すなわちモナドにおいて、部分と全体が相互作用しつつ世界は構成されるのである。

ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) はこのような全体的世界観こそが世界を見るための唯一の見方であると考え、独自の方法をもってして自然の探求をお

---

<sup>13</sup> ライプニッツ、同上、59 頁。

<sup>14</sup> ライプニッツ、同上、33 頁。

<sup>15</sup> カッシーラー、同上、66 頁。

こなった<sup>16</sup>。彼は自らの学問を形態学と名付け、自らの思考方法を対象的思惟と名付けた。ゲーテにとっては、ニュートンによって完成される近代科学は自然を把握することを可能にするどころか、むしろそれを阻害してしまう。ゲーテにとって近代科学は、自然を無機的な機械のようなものとみなすことによってその生命を奪い取ってしまうものでしかなかったのである。しかし、さらにゲーテは自らの詩人としての想像力をもってして、自然をたんなる客体とみなすのではなく、自然と自己を同一化することが可能であると考えていたのである。

ゲーテが採用した形態学は、以下の三点をその特徴とする。第一に、モザイクのようにばらばらになってしまう形ではなく、統一された形を求める。第二に、モザイクのように抽象化された形ではなく、具体的な形を求める。第三に、モザイクのように死んだスタティックな形ではなく、生きたダイナミックな形を求める。すなわち、自然を分析ではなく総合によって、機械論的な科学ではなく具体的な科学によって、そして固定された実在としではなく、生成変化する過程として把握することに努めたのである。かかる自然把握を可能とするためにゲーテが採用した方法こそが、「見る」ことである。ゲーテは自然を把握するために何よりも自然を観測することを重視した。ゲーテは、次のように述べる。

感覚は欺かない。判断が欺くのだ。

人間が自分の感覚を信頼し、しかもこの感覚を信頼に値するものにつくりあげてゆくならば、この世のなかで生きてゆくのに真に必要なすべてのものに、正しく対応することができる<sup>17</sup>。

このようにゲーテは、自然を抽象的思考によって部分の総和として捉えるのではなく、部分の相互作用を観察することによってその全体が把握されると考えたのである。すなわち、目の前の観察対象としての植物はたしかに自然の部分であるが、同時に、植物はその有機的全体としての自然を含む。したがって、詩人は、目の前の植物

---

<sup>16</sup> 以下、ゲーテの全体的世界観については、ゲーテ『自然と象徴—自然科学論集—』（高橋義人編訳、前田富士男訳、富山房百科文庫、1982年）、『色彩論』（木村直司訳、ちくま学芸文庫、2001年）および、高橋義人『形態と象徴 ゲーテと「緑の自然科学」』（岩波書店、1988年）を参照。ユンガーとゲーテの関係性についての研究としては、おもに文学的観点からユンガーの文学作品へのゲーテの影響を分析したもととして、Wonseok Chung, *Ernst Jünger und Goethe Eine Untersuchung zu ihrer ästhetischen und literarischen Verwandtschaft*, Peter Lang, 2008.があげられる。

<sup>17</sup> ゲーテ『自然と象徴—自然科学論集—』、高橋義人編訳、前田富士男訳、富山房百科文庫、1982年、117頁。

を観察することによって想像力によって自然全体を把握することが可能となるのである。

以上のようにゲーテおよびライプニッツにおける全体的世界観について概観してきた。両者はともに部分の総和として世界をみるのではなく、部分が生成変化することによって全体が形成されると同時に、部分はそれ自体として自らの独自性を発揮することによって全体を反映するという見方を共有していることが明らかとなった。このように両者は世界を部分と全体の相互作用によって成立しているとする全体的世界観を展開しているといえるが、両者には相違点もみられる。ライプニッツは全体的世界観が、数学的思惟によって理解可能であるとみなしていた。すなわち、一でもあり多でもあるモナドは神による予定調和という秩序によって貫かれており、その秩序は数学的思惟によって解明されうると考えていたのである。しかし、ゲーテにおいて、数学的思惟は世界を抽象化してしまい機械論的自然観に結びつくものとして退けられていた。ゲーテにとって機械は、あくまでも無機的な物であり、有機体としての自然とは真っ向から対立するものとみなされていたのである。その結果、ゲーテは植物を観察し、想像力を駆使することによって自然全体を把握することができると考えたのである。

## 第二節 形態と全体と部分

ゲーテは対照的思惟により目の前の生成変化する自然を見ることによって世界全体を把握することが可能である考え、ライプニッツは世界の最小単位であるモナドの相互作用によって世界は構成されていると考えた。これら両者の世界観を継承し、20世紀において新たな全体的世界観を提示した人物こそがエルンスト・ユンガーである。そこで以下ではユンガーにおける全体的世界観が『労働者』において、どのように展開されているのかを見ていこう。具体的には、ユンガーが『労働者』において、「労働者 (Der Arbeiter)」をどのように位置づけているのかを検討することを通して、形態としての労働者による有機的構成としての全体的世界観が提示されていることを明らかにしていく。

『労働者』というタイトルにある通り、この書物は「労働者 (Der Arbeiter)」が主要な考察対象とされている。しかし、ここで注意しなければならないのは、この「労働者」という言葉が特異な意味で用いられている点である<sup>18</sup>。まずユンガーは「労働者」

---

<sup>18</sup> 「我々は労働者のうちに新しい身分や新しい社会や新しい経済の代表を見ることを拒む。労働者はそれら以上のもの、すなわち自らの法則に意基づいて行動し、自らの使命に従い、特別の自由に参加する、独自の形態の代表であるか、それとも無かの、いずれかだからである。」 (Ernst Jünger, op.cit., S.71. エルンスト・ユンガー『労働者』川

を市民的価値と敵対する存在としてみなしている。ユンガーにとって労働者とは、「すでに早くからあらゆる市民的な価値判断との断固たる対立を標榜し、この対立の実感から自らの運動の力を引き出してきた<sup>19</sup>」人びとなのである。そこでまずは、ユンガーにとって、市民社会とはどのような秩序なのかを確認していく。

ユンガーにとって市民的価値とは、自由概念にもとづく個人によって社会の安全を維持していくべきである、という価値観である。したがって、市民社会とはこのような市民的価値を具現化した秩序なのである。市民社会では、理性的主体としての市民たちが話し合いによって物事を解決することによって、その安全性を担保する。このような市民的態度において、暴力的なモメントは排除され、理性的・道徳的に振舞うことが美德とされる。しかしながら、ユンガーにとって、このような市民社会は、仮初の秩序でしかない。なぜならば、社会秩序を形成するためには、そのための暴力が駆使されたという事実を市民社会は隠ぺいするからである。ユンガーはそのような市民社会の欺瞞を

しかし、市民は、独自の流儀にではなく、むしろ一般的に道徳的なものに自らの自由を認めるがゆえに、責任を引き受けることをしない。市民が、自分のために支配の扉を最初にこじ開けてくれた本来の行為者と暗殺者とを、その任務が終わるやいなや処分してしまう、とうことほど、それを実証する好例はない<sup>20</sup>。

と指摘する。このように、市民は自らの安全を担保するために暴力を拒否するがゆえに、「根源的なもの<sup>21</sup>」との接点を有することができないのである。

---

合全弘訳、月曜社、2013、83 頁。) なお、Der Arbeiter の訳語に関して、例えば蔭山宏は、ユンガーの Der Arbeiter が通常のサラリーマンのような労働者とは異なる点が多いことから、「労働人」という訳語をあてている。(蔭山宏『ワイマール文化とファシズム』(みすず書房、1986 年、71 頁) しかし、本稿では、ユンガーの Der Arbeiter が通常の労働者と乖離した存在ではなく、むしろむしろその変容過程をユンガーが重視していると考え、川合全弘の訳に則った「労働者」という訳語を採用する。

<sup>19</sup> Ebd., S.20. (同上、17 頁。)

<sup>20</sup> Ebd., S.25. (同上、23 頁。)

<sup>21</sup> 根源的なものの源泉についてユンガーは次のように述べている。「根源的なものの源泉 (die Quellen des zelementaren) は二種類ある。それはまず、海が最も穏やかな風するときにも危険を秘めているのと同様に、常に危険である世界の中に存在する。第二にそれは、遊技と冒険、愛と憎、勝利と没落に憧れ、安全のみならず危険をも必要と感じる人間の心の中に存在する。このような心にとって、完全に保護された状態は、当然ながら不完全な状態と映じる。」(Ebd., S.56.同上、65 頁。)

さらに、市民社会においては、計算可能性によって社会秩序を維持される。その顕著な例が、経済活動である。経済活動において市民は、計算によって未来を予測し、その予測をもとに交渉によって互いの利益を調整する。このような思考をユンガーは、「経済的思考そのものの独裁 (einer Diktatur des wirtschaftlichen Denkens an sich)」と呼ぶ。このような思考においては、すべてが利益のための計算に終始してしまい、「戦線の突破を可能にするような位置がまったく存在しない<sup>22</sup>」のである。

以上のように、ユンガーにとって市民社会とは、市民的自由・道徳および経済的思考によって人びとの行動が制限されてしまっている社会である。しかし、市民社会において、その秩序維持から逸脱する人びとがいる。そのような人びとこそが労働者なのである。しかし、先述した通り、ユンガーが、市民と敵対する人びととして描き出す労働者は、単なる経済活動の担い手では決してない。ユンガーにとって、労働者とは形態にほかならないのである。そこで、形態としての労働者とはいかなる存在であるのかについて検討していく。

ユンガーは形態について「形態の中に常住するものは、“部分の総和を超える全体”、解剖学的時代には手が届かなかった全体である (In der Gestalt ruht das Ganze, das mehr als die Summe seiner Teile umfaßt und das einem anatomischen Zeitalter unerreichbar war) <sup>23</sup>」と述べる。すなわち、形態とは、たんなる部分の総和でもなければ、一つの部分でもない。たとえば、人間について考えてみよう。人間の各構成部分を合成しただけでは、具体的な実在する人間とみなすことはできない。先述したバラの例のように、今・ここにいる人間、目の前に現れている人間は決して分析された部分の総和によって抽象的に理解されるものではない。「人間は、具体的に把握可能な個々人として理解されるかぎり、形態をもつ<sup>24</sup>」が、人間を「単に知性の様々な紋切り型の一つにすぎない人間<sup>25</sup>」として見た場合、それは決して形態とは呼べないのである。したがって、「ひとりの人間は、彼を構成する原子、四肢、臓器と体液の総和を超え<sup>26</sup>」ていると言える。さらに形態は人間といった具体的な実体としてだけ現れるのではない。「歴史は、諸形態の運命をその対象とするのと同様に、それ自体が形態である<sup>27</sup>」とユンガーが述べているように、世界のあらゆる事象は形態として把握されるのである。

では、なぜユンガーは特に労働者に対して形態において特権的な地位を与えるのであろうか。疑問を解く鍵は、ユンガーが、労働者を戦場における兵士の延長線上に置

---

<sup>22</sup> Ebd., 32. 同上、34 頁。

<sup>23</sup> Ebd., 37. 同上、40 頁。

<sup>24</sup> Ebd. 同上。

<sup>25</sup> Ebd. 同上。

<sup>26</sup> Ebd., 38. 同上、41 頁。

<sup>27</sup> Ebd., 39. 同上、42 頁。

いているという点にある。ユンガーにとって、まず形態を把握した人びとは兵士である。戦場の前線において兵士は、自らの死に対して恐れを抱くことなく突撃する。なぜ彼らはそのような狂気ともいえる行動をとることができたのか。ユンガーは、彼らが世界を形態として把握していたからこそこのような行動が可能であったと考えるのである。すなわち、世界を形態として把握するならば、死は決して身体的な死を意味するのではない。つまり、生きた肉体と死骸には決定的な差異がある。その差異とは、「肉体がその構成要素の総和を超えるのに対して、死骸がその解剖学的諸部分の総和に等しい<sup>28</sup>」という点に求められる。ユンガーは次のように述べている。

真の形態は、自らの内に全体を秘めているので、全体を要求する。それゆえ、人間が形態とともに自らの使命、自らの運命を発見することになるのであり、そして戦士にその最も重要な表現を見出す犠牲行為を人間に可能ならしめるものは、この発見なのである<sup>29</sup>。

つまり、形態は絶えず変化し続けるという点において永遠性を有し、人間はその自覚によってはじめて形態を把握することが可能なのである。このような世界の見方は、市民社会においては危険思想とみなされる。なぜならそれは決して理性的・合理的な思考の範疇に収まるものではなく、市民の秩序を崩壊させる恐れがあるからである。しかし、市民社会においても、形態との関係性を有する人びとが存在する。それこそが労働者である。

ユンガーにおいて労働者がいかなる存在だと規定されているのかについて考えるためには、そもそもユンガーが労働とはいかなる性質のものであると規定しているのかについて確認しておく必要があるであろう。労働についてユンガーは、

労働は拳や思考や心臓の律動であり、昼夜の生活であり、学問、愛、芸術、信仰、礼拝、戦争である。労働は原子の振動であり、星辰と太陽を動かす力である

<sup>30</sup>。

と記している。ここで労働として列挙されている内容からわかる通り、ユンガーにおける「労働」は常識的に考えられる労働の範疇を超えたものである。いうなればそれは、世界を形成するあらゆる力であり運動だと言うことができるであろう。このような力を具体的に発揮する存在こそが労働者なのである。さらに、ユンガーは労働に個別的労働性格と全体的労働性格という二つの性質を併せ持つと述べている。個別的労働

---

<sup>28</sup> Ebd. 同上、43 頁。

<sup>29</sup> Ebd., S.42. 同上、45 頁。

<sup>30</sup> Ebd., S.72. 同上、84 頁。

働性格とは、労働があるある個別的な仕方では表現されている場合の性質である。たとえばある個人が何かを作る作業を行う場合、その作業だけに着目するならば、それは労働の個別的な性格を発揮していることとなる。しかしながら、労働には個別的な性格だけでなく、全体的な性格をも有しているという点が重要である。全体的労働性格とは、労働が、ある個別的な現象を超えて全体性を持つという性質である。先述した例であれば、ある個人の作業の影響は、決してその場にとどまるものではない。その作業はまさしく世界全体を作り出すという作業としても捉えることができるのである。このように労働は、自らの力の発揮によって世界全体の連関を新たに生み出すという意味において全体的な性格を有するのである。これら個別的労働性格と全体的労働性格は決して互いに排他的な関係性にあるのではない。むしろ、相互依存的な関係にあると言える。すなわち、ある個人の労働において、個別的労働性格をより発揮すればするほど、より全体的労働性格が新たに形成されていくという関係性にあるのである。そして、このような労働の性格を体現し、その力を十分に発揮する能力を有する人々をユンガーは労働者と呼ぶのである。

ユンガーは、労働者と兵士の近似性に注目する。労働者は、自らの意志によって行動するのではなく、命令によって行動する。さらに、決して自らの個性を発揮することに執着しない。むしろ、自らの個性を抹殺し、ただ忠実に自らの作業に没頭する。このような態度から、労働者は「個人」ではなく「類型」として把握されるとユンガーは述べる。さらに、労働者は複数で協働することによって、自らの能力を超えたモノを生み出す。そしてそのモノが、自らの時代を超えて残り続けるということを感じとっている。ユンガーは労働者が作業に徹する際に、労働者が次のような感情を持つと述べている。

木蔭の下や荒野の砂中に埋もれるこれらの石は、権力者たちの力の記念碑であるばかりでなく、名もなき労働の、ここに費やされたごくささやかな手仕事の記念碑でもある。(……) あらゆる努力の儚さに対する悲しみと、それにもかかわらず自らが不滅なるものに属することを繰り返し自らの象徴において表現しようとする意志への誇り<sup>31</sup>

この描写は労働者が働く場の描写である。労働者は、自らの作業において、たしかに表面的には自らの個性を発揮することなく、ただひたすら作業をこなす続ける。芸術家とは異なり、労働者はつねに「無名」なのである。しかし、同時に、労働者は自らの作業が不滅なるもの、すなわち形態を生み出す作業であることをも感じとるのである。

---

<sup>31</sup> Ebd., 67. 同上、78 頁。

このような類型としての労働者の集合体をユンガーは有機的構成と呼ぶ。有機的構成とは、たんなる人間の集合体ではない。「人が有機的構成（*einer organischen Konstruktion*）に属するのは、個人的な意志決定によって、つまり市民的自由権の行使によってではなく、むしろ個別的労働性格（*der spezielle Arbeitscharakter*）」が規定する事実上の関連（*eine tatsächliche Verflechtung*）によってである<sup>32</sup>」とユンガーが述べていることから、有機的構成とは、労働者が自らの類型に徹することによって、たんなる部分の集合ではなく、形態として全体性を獲得した集合体なのである。

ここで注意しなければならないのは、労働者はたしかに市民社会において価値を置かれるような自らの自由意志を発揮することはないが、むしろその態度には別種の新たな意志が見出されるのである。その態度をユンガーは英雄的現実主義と呼ぶ。ユンガーは英雄的現実主義について次のように述べる。

個々人の態度は、彼がその逆の状態、すなわち最前線の戦闘位置と労働位置に置かれることによって、むしろ重荷を負わされている。この位置を堅持し、それにもかかわらずそこに埋没しないこと、運命の素材であるばかりでなく、運命の担い手でもあること、生活を必然的なものの戦場としてだけでなく、自由の戦場としても理解すること、これこそ、我々がすでに“英雄的現実主義（*der heroische Realismus*）”として特徴づけた能力である<sup>33</sup>。

すなわち、労働者はたしかに一見すると、まったく画一的であり個性を剥ぎ取られた存在であるかのように映るが、個性が完全に剥ぎ取られているわけではない。むしろ、ユンガーにとって人間は、市民的価値を捨て去り、形態としての自らの生を受け容れること、この態度によってこそ、真の新しい人間になることができるのである。そしてこの、英雄的現実主義という態度によってこそのみ、労働者は自らの力を発揮することができるのである。

労働者は、市民的価値を破壊し、無名の労働者すなわち類型としての労働者として作業に徹することによって、形態を生み出す。しかしこのような作業を可能にするのは、労働者がすでに形態という自らを超えた何かを感じるとることができるからなのである。この点に、ユンガーにおける全体的世界観の特徴がある。すなわち、労働者は、英雄的現実主義によって無名の労働者として作業に徹することによって類型と化すが、同時にその作業は形態という全体を生み出すこととなるのである。したがって、類型としての労働者という部分がなければ形態という全体はない。しかし、労働者自身も形態という全体を感じとることによって行動するという点において、労働者

---

<sup>32</sup> Ebd., 124. 同上、150 頁。

<sup>33</sup> Ebd., 70. 同上、81 頁。



は形態という全体をすでに包含していると言える。このように、労働者は形態としての部分でありながら、同時にその形態という全体を表現するのである。すなわち、労働者は部分であり全体でもある形態として把握されるのである。このような労働者によって形成される秩序をユンガーは有機的構成と呼ぶのである。

## 第二章 『労働者』における審美的テクノロジー

本章では、第一章で検討したユンガーにおける全体世界観がいかなるモメントによって支えられているのか、ユンガーにおける全体世界観の特徴をより浮き彫りにしていく。第一章で明らかにしたように、ユンガーの全体的世界観は、労働者が英雄的現実主義によって自らの力を発揮することで形態を形成しつつ、その形態の一部として行動することによって成立していた。では、労働者はいかなる契機によって英雄的現実主義による行動をとることとなるのか。この間に答えるために欠くことのできないモメントこそが美とテクノロジーなのである。そこでユンガーは、美とテクノロジーについていかなる洞察にもとづき、この両者を形態と結びつけているのかを検討していく。そしてユンガーの全体的世界観は、審美的テクノロジーによって形成されていることを論証していく。

### 第一節 ユンガーにおける美

第一次世界大戦における前線での戦闘体験はユンガーにおける美を語るうえで、決して欠くことができない<sup>34</sup>。なぜならば、ユンガーはこの前線という異常な場において美を体験し、その体験にもとづき自らの思想を展開してきた作家だからである。いま前線という場に対して「異常」という言葉を用いた。もちろん前線が異常であるのは一見すると当たり前かもしれない。日常ではありえないことが当然のように起きる。人が当たり前のように死ぬ。私語は許されない。自らの意志で自由に動くことは決して許されないのである。実際、第一次世界大戦の戦場において、人間は、もはやその人間としての資格を奪われ、単なる無名の兵士として、軍隊という全体の一部として機能するに過ぎなかった。第一次世界大戦の戦場において、新たに主要な戦術として登場した塹壕戦。さらに新たな兵器として機関銃が戦地に導入された。その結果、兵士は塹壕から上官の命令によって敵へ向かって突撃しようとも機関銃の機銃掃射によって、大量にそして一瞬にしてその生命を奪われた。このような悲惨な戦場に直面したならば、おそらく通常の間人は、その悲惨さに絶句するであろう。少なくともこのような場を称賛することなど決してないであろう。

しかしながら、ユンガーはこのような場に対して全く異なる評価を下す。彼はこの前線における体験において美を見出した。したがって、ユンガーにおける美とは異常

---

<sup>34</sup> ユンガーの前線体験の意義については、とくに稲葉瑛志「前線兵士の沈黙と虚構の要請——第一次世界大戦における前線兵士の語りとエルンスト・ユンガーの『鋼鉄の嵐のなかで』——」、『文明構造論』、10 巻、2014 年、141 - 179 頁、を参照。

な場における美なのである。では、いったいなぜユンガーは、このような一見すると凄惨な場に美を見出したのであろうか。

この問を考えるために、まずは戦場の特異性を市民社会と比較することによって明らかにしていこう。戦場において市民的価値は一切の意味を持たない。戦場において理性的・道徳的な態度は、作戦の邪魔でしかないのである。戦場において兵士は自らの判断によって行動することはなく、ひたすら命令に従う。戦場において重要であるのは、命令を徹底的に正確に遂行することなのである。このように、戦場においては、市民社会で身に着けた常識は一切の意味を失い、ひたすら行動することによってのみ兵士の存在意義は与えられる。兵士は、行動の瞬間に日常性とはまったく異なる世界に属することとなるのである。このように日常性を破壊し、新たな秩序を垣間見る、その瞬間こそがユンガーにおける美なのである。いうなればこれは、破壊の美である<sup>35</sup>。

このようにユンガーは戦場において破壊の美を見出したが、ユンガーにとって、もはやこの美は戦場においてのみ見出されるものではなかった。なぜなら、市民社会において、労働者は、兵士と同様、もはや市民的価値に追従することはなく、むしろその市民的価値を破壊する存在であったからである。実際、ユンガーは、「驚異的なものとの出会いは、至るところにあるか、もしくは全くないかのいずれかである。換言すれば、それが形態の特徴なのである<sup>36</sup>」と述べている。もはや市民的価値に意味を見出すことのできない労働者にとって、市民社会はあらゆる点で破壊されている。そのような意味で、破壊の美はあらゆる場所に見出される。しかし、市民にとっては、それはあくまでも常識に属するのであって、そこに美が見出されることはまったくないのである。

この破壊の美は、フロイト (Sigmund Freud, 1856-1939) が人間の無意識として発見した死の欲動・破壊衝動であるタナトスと近いものだと言える。フロイトによれば、「人間とは、攻撃された場合だけに自衛するような柔和で、愛を求める存

---

<sup>35</sup> このようなユンガーにおける美については、Karl Heinz Bohrer, *Die Ästhetik des Schreckens Die pessimistische Romantik und Ernst Jüngers Frühwerk*, Carl Hanser Verlag, 1978. および大貫敦子『『瞬間性』の美学』、『現代思想』、14 卷 11 月、1986 年、84 - 95 頁。を参照。ボーラーは、ユンガーの初期作品に顕著にみられる驚愕の美を、美的モデルネの可能性を示唆したとして評価する。しかし、ボーラーは、『労働者』以降のユンガーは、美的モデルネを具体的な政治秩序と結びつけてしまったことによって、美のポテンシャルが失われてしまったと主張している。しかしながら、本稿では、『労働者』はむしろユンガーの初期の驚愕の美のポテンシャルをより深化させたものであると考える。

<sup>36</sup> Ernst Jünger, op.cit., S.233. エルンスト・ユンガー、同上、288 頁。

在ではないし、人間に与えられた欲動には、多量の攻撃衝動が含まれる。とかく否定されがちではあるが、これが背後にひかえている現実<sup>37)</sup>である。この欲望は、「利益についての理性的な判断よりもつねに強い<sup>38)</sup>」ものであり、この欲望を抑えるためには「人間の本性に反する」あらゆる方法がとられる。その方法こそが文化的営みである。フロイトによると、「文化とは、人類という種において演じられたエロスと死の闘い、生の欲動と破壊欲動の闘い<sup>39)</sup>」である。すなわち、人間はタナトスを抑えつめるために、理性的・道徳的に振舞うことを余儀なくされるのである。その結果、「文明化された人間は、幸福になる可能性の一部を捨てて、共同生活における安全性を手にしたのである<sup>40)</sup>。」言うまでもなく、ここで言及される文化的生活こそがユンガーの非難する市民社会そのものである。フロイト自身が認めるように、市民社会は人間の本性に反するものであり、ユンガーにとってタナトスは決して抑えつけられるべきものではない。むしろ、タナトスをいかに行動に結びつけ秩序を生み出すことができるのかということこそが重要なのである。

さらにユンガーにおける美は破壊の美にとどまるものではない。ユンガーにおける美は破壊の美に連なる形態としての美をも包含していると考えられる。すなわち、異常な場において、兵士は日常性を剥ぎ取られると同時に、新たな秩序に組み込まれていることを直観するのである。この新たな秩序こそが形態である。戦場における兵士は、軍隊の一部として任務を遂行するが、同時に、軍隊は兵士の行動によって形成される。兵士によって軍隊という有機体的秩序が形成されるのである。これにより、兵士は共同性を獲得し、自らを超えた形態の一部となる。この全体と部分の相互作用に進み入ることが形態の美なのである。労働者も兵士と同様に、労働によって形態を形成する。

そうであるならば、先述した英雄的現実主義は、ある種の美的態度と呼ぶことができる。労働者は、市民的価値の仮面を剥ぎ取り、労働者としての類型に徹する。この態度は、自らの個性を捨て去り、形態という新たな秩序に身をゆだねる態度である。労働者が英雄的現実主義によって行動を起こすとき、労働者は自らの永遠性を感じとり自らの役割を引き受けるのである。

以上のように、ユンガーにおける美は、破壊の美に連なる形態の美であるといえることができる。この美は、決して市民社会に安住することによっては感じとることのできない美である。しかしながら、労働者は、市民的価値と敵対することによって、こ

---

<sup>37)</sup> フロイト『幻想の未来／文化への不満』、中山元訳、光文社古典新訳文庫、2007年。

<sup>38)</sup> 同上、224頁。

<sup>39)</sup> 同上、243頁。

<sup>40)</sup> 同上、230頁。

の美をかんじとることができる。そして英雄的現実主義によって形態という市民的秩序とは異なる新たな秩序の可能性を垣間見るのである。

## 第二節 ユンガーにおけるテクノロジー

前節で検討したように、ユンガーは第一次世界大戦の前線での体験をもとに特異な美意識を有した。『労働者』においてユンガーが、有機的全体性について言及する際に、彼が前提としているのはかかる運動として全体の部分として機能しつつ全体を形成する無名の兵士たちである。しかし、ユンガーにおける全体的世界観を構成するモメントは美だけではない。そのもう一つのモメントこそがテクノロジーである<sup>41</sup>。ユンガーは、『労働者』において、テクノロジーについて、

技術とは、労働者の形態が世界を動員する方法なのである（Die Technik ist die Art uns Weise, in der die Gestalt des Arbeiters die Welt mobilisiert）。人間が決定的に技術との関係を取り結ぶ程度、人間が技術によって破壊されるのではなく支援される程度は、人間が労働者の形態を体現する度合いに掛かっている<sup>42</sup>。

と述べている。すなわち、部分としての労働者が集合体として有機的構成を形成するさいに、労働者を結び付ける機能こそがテクノロジーなのである。では、具体的にテクノロジーがどのように機能することによって、労働者の「総動員／総流動化（die totale Mobilmachung）」は遂行されるのであろうか。

まずテクノロジーに関して、ユンガーは、一般的に受け入れられてきた見方を退ける。つまり、テクノロジーを、「市民的空間において、理性的で道徳的な完全性を目指す進歩の道具<sup>43</sup>」とする見方である。このような見方は、テクノロジーをあくまでも人間の理性を実現する道具・手段としてみなしている。しかしながら、このような技術観は、テクノロジーが戦争で果たした役割を看過していると言わざるを得ない。というのも戦争において兵士は、命令にもとづいて兵器によって敵をせん滅することに没頭する。その場において、テクノロジーはもはや理性的でもなければ道徳的なものでもない。さらに、兵器は、兵士が兵士として機能するための道具ではあるが、同時に

---

<sup>41</sup> ユンガーにおけるテクノロジーの意義については、今井敦「ユンガー兄弟の技術論——「総動員／総流動化（die totale Mobilmachung）概念を軸として——」、日本独文学会編『ドイツ文学』、148 巻、2014 年、56 - 70 頁、および、Vincent Blok, *Ernst Jünger's Philosophy of Technology Heidegger and the Poetics of the Anthropocene*, Routledge, 2017. を参照。

<sup>42</sup> Ernst Jünger, op.cit., S.160. エルンスト・ユンガー、同上、197 頁。

<sup>43</sup> Ebd., S.166. 同上、205 頁。

兵士は兵器を用いることによって軍隊の一部として機能するという点において、兵士と兵器の関係性は逆転する。すなわち、「ひとは技術的過程の主体となるばかりでなく、同時にその客体ともなる<sup>44</sup>」のである。

テクノロジーの及ぼす影響はこれだけではない。テクノロジーのさらなる機能として、標準化作用があげられる。というのも、テクノロジーの発展が意味するのは、その計算可能性の増大であり、規格化・明確化が進行するからである。したがって、人間はテクノロジーが発展すればするほど、同じような作業に徹することになる。例えば、機関銃が用いられる戦闘においては、兵士は敵・味方の違いに関係なく、機関銃の操作を行うのみである。この動作において、兵士は決して自らの独自性を発揮することはなく、ただ定められた過程に従事するのみである。このような意味で、テクノロジーによって兵士は、個性を持たない無名の兵士になるのである。

ユンガーが見るところでは、かかるテクノロジーによる「総動員／総流動化」という状態は、もはや戦場における兵士に限定されるものではない。この作用は、生活全般を覆っているのである。その現象をユンガーは、生活のあらゆる場所に見いだす。例えば、テクノロジーの発達にともなう交通網の発達である。テクノロジーの発達により、交通手段は蒸気機関そして電動列車という形で進展してきた。この結果、人々は地球規模でより緊密につながりを持つ。このようにテクノロジーは空間的に人々を結び付けることによって全体性を出現させるのである。それだけではない。先述したように、人間を主体であると同時に客体でもある存在へと変貌させ、さらに標準化作用をとまなうことによって、人間を「類型としての労働者」へと変貌させるのである。

この段階において、テクノロジーという無機的なモメントは、人間を「類型としての労働者」として有機的構成に巻き込む機能を果たしていると言える。ユンガーは次のように指摘している。「このような事態の経過は、進行する手段の完成過程と相俟って、有機的な力と機械的な力とのいっそう緊密な融合を要請する。これを我々は有機的構成と名づけた<sup>45</sup>。」すなわち、ユンガーにおいて、無機的なテクノロジーの「総動員／総流動化」作用によって、有機的全体性という美的秩序が出現するのである。実際、ユンガーは機械について次のように表現している。

つまり刻印は出発点の特徴でなく、むしろ到達点の特徴である。多くの複雑な可能性を持っていることではなく、むしろ非常に明確で非常に単純な可能性を持っていることが、人種の特徴である、こう考えれば、初期の機械も、まだ加工されていない材料に似ている。それらは普段の作業工程の中で磨き上げられていくのであ

---

<sup>44</sup> Ebd., S.170. 同上、209 頁。

<sup>45</sup> Ebd., S.223. 同上、275 頁。

る。機械は、どれほど規模と機能を増大させようとも、言わばいっそう大きな明快性という溶媒の中に溶かし込まれていく。それに応じて、機械は、エネルギーと経済の地位を高めるばかりでなく、審美的な地位（an ästhetischem Rang）をも高める。<sup>46</sup>

すなわち、テクノロジーの標準化作用によって、労働者は形態という全体を形成しつつその中にくみこまれていくが、その度合いに応じて、形態としての美はより完成に近づいていくのである。

以上のように、ユンガーにおける全体的世界観は美とテクノロジーの協働関係によって形成される形態的秩序なのである。したがって、このユンガーにおける全体的世界観は、審美的テクノロジーによる全体的世界観と呼ぶことができるのである。この世界観における全体性は、ライプニッツのように、数学的思惟によって徹頭徹尾、力学的関係性に還元されるものでもなければ、ゲーテのように、数学的合理性を排除するものでもない。むしろ、ユンガーの世界観は、無機的かつ合理的なテクノロジーが地球上に拡大するにしたがって、むしろそこに有機的連関が出現するという逆説を孕む世界観である。このような労働者の形態によって構成される秩序こそがユンガーにおける美的秩序なのである。

---

<sup>46</sup> Ebd., S.178. 同上、219 頁。

### 第三章 労働国家における美と政治

本章では、前章で検討したユンガーにおける審美的テクノロジーによる全体的世界観をもとに、ユンガーの国家像が有する意義について検討していく。ユンガーは『労働者』の後半部において、具体的な国家像として「労働国家」なるものについて詳述している。それは人間が、もはや「人間」としてではなく「労働者の形態」としてのみ機能する国家である。この国家像は一見すると、ユンガーの労働国家は、もはや人間が機械と化し、国家という全体の部分としてのみ機能している秩序であるかのように映る。しかしながら、決してそうではない。ユンガーの労働国家は機械論的秩序ではなく、形態的秩序であり美的秩序なのである。したがって、本章では、まずユンガーが具体的に労働国家をどのような国家であると述べているのかを確認したうえで、その国家像が、ユンガーの全体的世界観とどのような関係性にあるのかを全体主義国家であるナチズムと比較しつつ検討していく。

#### 第一節 労働国家へと至る道

ユンガーは『労働者』の後半部において、市民社会から労働国家への移行がどのように展開されるのかについて詳述している。以下では、その移行の過程がいったいどのような過程であるのかについて検討していく。

ユンガーは市民社会から労働国家への移行が、次の三段階に則って展開すると述べている。その三段階とは、「作業場の状況」、「計画状況」、「労働国家」という三段階である<sup>47</sup>。したがって、それぞれの状況がいかなる状況であるのかを順を追って検討していく。

まず、「作業場の状況」とは、市民社会においてテクノロジーによって人びとの標準化が進展している段階である。この段階において、人々は未だ市民的価値観のもとで生きている。しかしながら、生活のあらゆる領域において、テクノロジーを駆使することによって、その個性を徐々にではあるが失っていく。すなわち、人々は単調な作業を通じて、市民から類型人としての労働者へと変貌していく段階である。この段階において、労働者は市民と敵対する存在として現れるが、いまだ市民社会に取って代わられる具体的な秩序は有さない。すなわち、労働者は、個人として形態という全体を感じとってはいるものの、集団化はなされていない段階である。

---

<sup>47</sup> ユンガーの市民社会から労働国家への移行については、川合全弘「ワイマール共和国期におけるエルンスト・ユンガーの政治思想（二）」、『京都大学法学叢書』、113巻、1983年、86 - 98頁。を参照。



この作業場の状況を経て、市民社会における価値は崩壊し、新たな秩序の準備が遂行される段階へと移行する。その段階こそが、「計画状況」である。この段階においては、市民社会において秩序の正統性を担保していた憲法や個々人による社会契約といった前提が破棄される。なぜならば、この段階において労働者は、テクノロジーによる標準化作用によって、もはや市民的価値である個性をはぎとられてしまっている。しかしながら、同時に、英雄的現実主義を発見し、自らの美的直観に従って形態という新たな秩序を垣間見るのである。その結果、政治体制は自由民主主義から労働民主主義（*der Arbeitsdemokratie*）へと移行する。労働民主主義とは、類型としての労働者が、テクノロジーによる「総動員／総流動化」を集団的に遂行する政治体制である。この労働民主主義について、ユンガーは「そこで語られることになる労働や民主主義がもはや我々のよく知る意味でのそれでない<sup>48</sup>」と述べていると通り、市民社会における自由民主主義とはまったく異なる性質を有する政治体制なのである。

では自由民主主義と労働民主主義はいったいどのような点で性質が異なるのであろうか。端的に述べるならば、その相違点は、労働民主主義において人々は、「労働」によって統一性を獲得するという点である。ここでいう労働とは、決してたんなる作業だけを意味するのではない。ユンガーにおける労働とは、形態を生み出す運動を意味する。すなわち、人々が自らの作業によって固有性を発揮しつつ、自らを超えた何かを感じとるという行動全体を指すものである。この労働によって、人々は労働者と化し、他者との精神的紐帯を直観することができるのである。このような労働によるつながりに正統性を持つ集団こそが労働民主主義である。かかる政治制度において、人々は民族や血筋といった先天的な要素によって区別されることはなければ、経済的な格差によって社会的序列が決められることもない。労働者は、有機的構成の自らの位置において、自らの力をいかに発揮するかによって序列が決定されるのである。以上のような性質を勘案するならば、労働民主主義においては、すべての労働者が自らの固有性を発揮することによって全体性を獲得することが可能であるという点において、実質的な平等を担保していると言えるのである。

さらに、この政治体制のもとでは、「政党や議会や自由主義的な報道機関や自由経済など、市民的自由概念の老朽化した諸機関<sup>49</sup>」は、市民社会で有していた意味を喪失する。まず議会については、「議会が市民的自由概念の機関および世論形成の制度から労働単位（*Arbeitsgrößen*）へと転換する<sup>50</sup>」とされる。すなわち、議会は国民の民意を反映する場ではなく、あくまでも労働全体の技術的な問題を解決し、またその内容を通達する場へと変貌するのである。さらに報道機関は、「自由な意見の機関から明確で厳

---

<sup>48</sup> Ebd., S.310. 同上、379 頁。

<sup>49</sup> Ebd., S.274. 同上、336 頁。

<sup>50</sup> Ebd., S.278. 同上、341 頁。

密な労働世界の機関へと転じる<sup>51</sup>。」つまり、もはや報道機関は、大衆の意見を伝えることには価値を置かず、出来事を正確に伝えることが求められることとなる。

これらの新たな諸機関の指針として登場するのが、「労働計画」であり、この労働計画に基づく命令によって軍隊的秩序が構成される。労働計画は、「完結性

(Abgeschlossenheit)、柔軟性 (Geschmeidigkeit)、軍事性 (Rüstung) という特徴を持つ<sup>52</sup>」とされる。換言すると、労働計画は、あくまでも類型人による有機的構成の中でおいてのみ適用されるという点で閉鎖的であり、さらに、この段階はあくまで計画段階であるという点において、その目標は変更されることが可能である。また、その内容は数学的緻密さによって具体的な目標を持ち、「参謀本部によって算出された時期に到達されるべき一連の行程を辿る、行軍<sup>53</sup>」のように遂行される。この労働計画に基づく労働者の法則的な作業によってはじめて、「大衆にも個人にも備わっていない労働の統一性 (die Einheit einer Arbeit) を可視化<sup>54</sup>」することが可能となるのである。ユンガーが、「我々が立ち会っているのは、一般的な原理に針路が与えられる過程であり、『何かからの自由 (Freiheit wovon)』が『何かへの自由 (Freiheit wozu)』に転換する過程である<sup>55</sup>」と述べているように、計画状況において、労働者へ労働計画という具体的な指針が与えられことによって、その全体性を獲得するのである。ここで言及されている「何かからの自由」とは言うまでもなく、市民社会における諸価値であり、根源的な力を遠ざけ、安全を確保しようとする態度である。かかる態度は、何よりも個性を重視し、自らの存在を超えた何かによって自らが規定されることを拒否する。しかしながら、ユンガーにとってこの態度は、人間がアトム化を促し、全体性の喪失へと至らせることとなる。他方で、「何かへの自由」とは、個人を積極的な行動へと促す。その行動へと至らせる態度こそが、ユンガーにおける英雄的現実主義である。人間は、「何かへの自由」によってはじめて個人ではなく、労働者として形態という全体の運動へと参与することが可能となるのである。

しかしながら、注意しなければならない点は、この段階はあくまでも移行の途中段階であるという点である。この計画状況において、労働者は、たしかに英雄的現実主義によって、市民社会とは異なる形態という新たな秩序へと歩みを進める。この新たな秩序を具体化するために、労働者は「労働計画」にもとづいて行動する。すなわち、徹底的な作為によって、労働国家を建設しようとするのである。しかし、ユンガーは、計画状況がいつ、どのような形で実現するのかについては詳述していない。し

---

<sup>51</sup> Ebd., S.281. 同上、345 頁。

<sup>52</sup> Ebd., S.288. 同上、354 頁。

<sup>53</sup> Ebd. 同上。

<sup>54</sup> Ebd., S.308. 同上、375 頁。

<sup>55</sup> Ebd., S.254. 同上、313 頁。

たがって、この計画状況は、ある意味において永遠に続く過程とみなすことができる。実際、ユンガーは計画状況について、「帝國的空間への歩み入りに先立つのは、諸々の計画風景の試験と鍛錬であるが、これについては今日まだ全く想像することができない<sup>56</sup>」と記している。そうであるならば、労働国家とはあくまでも理念型としての秩序であり、計画上は未完の過程、人間が労働者の類型として新たな可能性を常に更新し続ける過程であるとみなすことができるのである。

## 第二節 全体的世界観としての労働国家

以上の作業場の状況、計画状況という二段階を踏まえて、最終的な到達点としてユンガーが想定する秩序構想こそが「労働国家」である。この段階において、人間はもはや市民的価値の一切を破棄し、労働者の類型に徹することとなる。すなわち、人間は自らの個性を発揮することにはまったく価値を置くこともなければ、自らの考えによって行動を起こすこともない。この秩序においては、自由の意味は、市民社会におけるそれとはまったく異なるものである。すなわち、市民社会における自由が理性的主体の自己実現を意味していたのに対して、労働国家における自由とはひたすらみずからの作業に従事すること、つまり服従を意味することとなる。そこでの人間は、もはや「人間」と呼べる存在ではなく、画一的で「労働者の類型」として生きる存在となるのである。労働国家とは、類型としての労働者によって形成される有機的構成として、すべての人間があたかも国家という巨大機械の部品「かのように」機能する国家像なのである。しかしながら、ユンガーの全体的世界観はけっして機械論的な秩序ではなかった。そうであるならば、ここで述べたような、巨大な機械の部品と化した人間によって構成される労働国家という見方は、誤った見方だと言わざるを得ない。たしかに一見すると、類型と化した労働者は、市民社会におけるような個性を持たず、機械の部品のように見えるかもしれないが、全体的世界観という視点から労働国家を見るならば、そこには全く異なる人間像が映し出されているのである。

ユンガーにおける労働国家における労働者は、機械の部品のような存在ではない<sup>57</sup>。なぜならば、労働者において重要であるのは、自らの力を発揮することによって形態を形成しつつ自らもその運動の一部と化することにあるからである。すなわち、労働者はたしかに市民社会において価値を置かれる個性や主体性を有さないが、別種の主体

---

<sup>56</sup> Ebd., S.310. 同上、379 頁。

<sup>57</sup> 『労働者』における個人の意義に関しては、David Pan, *The Sovereignty of the Individual in Ernst Jünger's The Worker*, *Telos: Critical Theory of the Contemporary*, 2008(144), pp. 66-74. を参照。

性を有するのである。それこそが英雄的現実主義という美的態度であり、かかる態度によって可能となる個別的労働と全体的労働の相互作用による形態的秩序の形成である。労働者はたしかに命令を正確に遂行するという点で自らの思考によって行動することはない。しかし、その行動は形態という全体性の直観という美的態度によって促されているという点において、理性的主体性ではなく美的主体性と呼べるのである。かかる美的主体性によって、労働者は類型と化することが可能となるのであって、ユンガーにとっては、むしろこのように類型に徹することによってはじめて人間は根源的な力を実現することが可能となり、かかる人間こそが真の新たな人間なのである。労働国家における人間は、決して無機的で画一的な機械の部品ではない。労働者は、たしかに類型に徹するという点で個性は有さない。しかしながら、英雄的現実主義という美的態度によって自らの意志を発揮し、そして、自らに固有な力を行動へと移すことによって形態を形作るのである。このような能動的行動によって、有機的全体性へと自らを放り込むのである。

以上の考察を踏まえるならば、ユンガーの労働国家は、機械的なモメントと有機的なモメントをあわせ持つ両義的な秩序だということができるであろう。たしかに労働国家においては、テクノロジーによる画一化が完成され、生活のあらゆる領域は機械化される。そして、そこで生きる労働者も同様に、テクノロジーの担い手として表面上は機械的な秩序に則って稼働する機械のような存在となる。しかし、同時に、労働者は決して受動的にこの機械論的秩序にたんに組み込まれているわけではない。労働者は、個別性格と全体的性格とを有する労働を通して、自らを超える全体性を直観することによって、形態的秩序を形成する。この能動的な行動の契機なくして、労働国家は成立しえないのである。したがって、労働国家は、労働者による有機的秩序であるとも言えることができる。かかる両義性を孕みつつ、両者が統一されてはじめて労働国家は登場しうるのである。かかる国家像は、ユンガーにおける審美的テクノロジーによる全体的世界観という視点によってのみはじめて理解可能となる国家像であるが、先述した通り、けっして実現されることはない秩序なのである。

以上のように、労働国家は、機械論的／有機的な両義性を有する秩序であった。この点についてまず確認しなければならないことは、いったいこの秩序構想はナチズムによる全体主義国家と何が異なるのかという点である<sup>58</sup>。なぜならば、ナチズムも労働

---

<sup>58</sup> ここで『労働者』執筆に至るまでのユンガーとナチズムとの伝記的な関係性に簡潔に述べておく。ユンガーはナチズム台頭期において、ナチズムとの競合者であった。というのも、ユンガーは第一次世界大戦の敗戦後、急進ナショナリズム運動へと参加していたからである。そして運動の初期段階においては、ユンガーはナチズムがナショナリズムを具現化する政治運動として評価していたが、1920年代末にはユンガーがナチズムを見限ったことにより両者の関係性は破綻した。ユンガーがナチズムを見限

国家と同様に、アーリア人神話にもとづき、国民を同一化することによって有機的な国家体制を築いたと言えるからである。この点に関してまずいえることは、ナチズムはアーリア人という人種にもとづき同一化政策を行い、アーリア人以外の人種を基本的に排除した。しかしながら、ユンガーの労働国家においては、人種といった先天的なものによって特定の人間を排除する契機は存在しない。たしかに労働国家へと至る過程において、市民 - 労働者という対立構造は想定されているが、この対立はあくまでも世界観の相違にもとづくものであり、市民社会は労働国家へと至る前段階として捉えられているのである。

さらに、あくまでもナチズムは、プロパガンダによって大衆に訴えかけることによって権力を獲得した。しかしながら、ユンガーは、大衆と個人の関係性はコインの裏表の違いに過ぎないと述べ、大衆とは個人の集合でしかないと断じる。したがって、どれほどナチズムが市民社会を非難しようとも、結局のところ、それは市民社会の枠組みの内部にとどまっているのである。他方で、労働国家においては大衆も個人も存在せず、ただ労働者の類型が存在するのみである。そしてユンガーにとって、労働者によってのみ、市民社会でもナチズムでもない第三の可能性としての労働国家は実現されうるのである。さらに、ユンガーは独裁という形式についても拒絶している。たしかに労働国家において、労働者は命令に服従する。したがって、命令する主体が存在すると考えるのも無理はないであろう。しかし、ユンガーは、「この移行に際して集団主義的世界観の勝利の表明として大衆の喝さいが行われるか、それとも個人の喝采がそこに人物の勝利、『強い男』の勝利を認めるかは、全く重要ではない」と述べている通り、かならずしも独裁にもとづくものでもない。労働国家においては、労働の全体的性格と個別的性格が一体となっているのであって、そこではもはや、命令は自らの意志と同等のものと捉えられるのである。

以上の相違点以外で、ナチズムにおける有機的秩序と、ユンガーにおける有機的秩序の最も重要な相違点は、両者の有機性の差異である。すなわち、両者の有機的秩序は、全体と部分の関係性を考慮にいれるならば、まったく異なることがわかる。まずナチズムにおいては、個人がその固有性を発揮することによってナチズム国家という全体を形成する契機は存在しないと言える。すなわち、ナチズムにおいては、国家によってアーリア人至上主義というものが打ち出され、それに人々が賛同することによって政治体制が築かれるという点において、部分としての個人は全体である国家に含まれる存在なのである。しかしながら、ユンガーの労働国家においては、労働国家

---

った最大の理由は、ユンガーがナチズムを大衆迎合的であり、結局のところ市民社会の秩序維持に邁進していると考えたからである。(川合全弘「エルンスト・ユンガーのナショナリズム論——ナチズム観の特徴とその変遷」、権左武志編『ドイツ連邦主義の崩壊と再建』、岩波書店、2015年、154 - 182頁。を参照。)

という形態的秩序は、決して部分としての労働者抜きには考えられない。ユンガーにおいては、労働という力の運動そのものに個別的／全体的性格が内在するのであって、労働者がその個別的労働によって自ら固有の力を発揮することによって統一された形態が形成されるのである。換言するならば、労働国家においては、労働者が部分でもあり全体でもあるのであって、労働国家という全体に部分としての労働者が吸収されるわけではない。このように、ナチズムという国家像は、ユンガーの審美的テクノロジーによる全体的世界観とは相いれない国家像なのである。

以上のように、労働国家とは、市民社会ともナチズムとも異なる第三の可能性としてユンガーが構想した秩序なのである。労働国家は、市民社会のような理性的主体としての個人の集合体では決してない。労働国家においては、労働者が英雄的現実主義という美的態度によって、形態という自らを超えた運動を直観する。そして、かかる態度を他者と共有することによって統一された有機的構成を形作る。そしてさらに、この有機的構成が具体的な秩序として現れた国家こそが労働国家なのである。

## おわりに

本稿では、エルンスト・ユンガーの主著である『労働者』が、審美的テクノロジーによる全体的世界観という新たな世界観を開示した書物であることを検討してきた。全体的世界観は、ライプニッツのモノド論やゲーテの形態学によって発展してきた世界観であり、世界は全体と部分の相互作用によって構成されているとする見方であった。このような世界観は、その後の市民社会の発展によって退けられしまったと言える。近代科学の発達によって、人間はむしろ、理性によって分析的に世界を理解しようと努めてきたのである。しかし、ユンガーは、このような分析的思考にもとづく世界観は、もはや新たな時代には適さないと糾弾し、自らの前線での戦闘体験をもとに新たな全体的世界観を『労働者』において提示したのである。

ユンガーが見るところでは、市民社会において進展するテクノロジーの帰結は、人々の画一化・標準化である。その結果、労働者はあたかも戦場における戦士のように、盲目的に自らの作業に没頭することとなっている。市民が、個人として自らの個性に執着するのは対照的に、労働者はもはや個性に執着することはない。しかしながら、労働者は、テクノロジーによって標準化されると同時に、テクノロジーによって有機的構成へと動員される。労働者は、もはや個人として理解されるものではなく、形態として把握される存在となっているのである。ユンガーは、このような形態としての労働者からなる有機的構成に、戦場で体験した美を見出した。このように、ユンガーの全体的世界観においては、テクノロジーという無機物によって動員された労働者によって、有機的全体が生み出されるという点で逆説的なのである。

この審美的テクノロジーによる全体的世界観の具体的な顕現として、ユンガーは市民社会でもなく、ナチズムでもない第三の可能性としての国家像である「労働国家」を構想したのである。労働国家において、人間はもはやいかなる個性も有しない。それは、完全に類型としてのみ生きる労働者からなる軍事的国家である。このような国家は、個人／大衆という枠組み自体を拒絶し、独裁という形式すらも必要としない。あかたも自動機械かのように作動し続ける国家なのである。しかし、この国家において、人間から主体性が完全に失われているわけではない。労働者は、英雄的現実主義という美的態度によって、自ら形態的秩序を形成しつつ、その新たな秩序へと参入する。この点において、労働者は部分でありながら、全体をも包括する、運動としてみなされるのである。

最後に、このようなユンガーにおける審美的テクノロジーによる全体的世界観がいかなる現代的意義を有するのかについて検討していきたい。まず、先述した通り、ユンガーは労働国家が本当に実現されるとは考えていなかったという点について考察する。なぜユンガーは、ここまで詳細に労働国家への移行について記したにもかかわらず

ず、この秩序が実現すると明言しなかったのであろうか。その理由は、そもそもユンガーの全体的世界観自体に内在する矛盾にユンガー自身が気づいていたからではないかと考える。すなわち、ユンガーにおける労働者は、一方でテクノロジーを駆使する合理的な存在であるが、他方では形態へと身を投じる非合理的な存在でもある。労働者は常に合理／非合理を股にかけた矛盾を内包する存在なのである。このような人間像は、たしかに人間の重要な側面をとらえていると言えるであろうが、実際の人間は、このような不安定な状態を保つことは困難であろう。人間は、形態という全体性を渴望しつつも、自らの個性に執着するものである。そうであるならば、ユンガーの全体的世界観は、これら二つの側面が極大化されることによってもたらされる危険性を、労働国家という第三の可能性を提示することによって明示したと考えられるのではないか。すなわち、理性によって自らを完成させるという宿命によってニヒリズムに陥る市民社会は、人間をあまりに理性的・合理的な存在と捉えすぎてしまっている。他方で、ナチズムは個人をアーリア人神話という非合理的なモメントによって国家に吸収してしまった。しかし、ユンガーの全体的世界観が提示するのは、あくまでもテクノロジーという合理性と、美的態度という非合理性の両者がともに協働することによって成立する世界観である。これら両者はどちらを欠いてもならず、どちらかが極端化してもならない。このような人間像・世界観を提示した点にこそ、『労働者』を現代で読む意義があるのである。ただし、ユンガーの提示した全体的世界観が有する意義は、同時代にユンガーと同様に市民社会を批判しつつ独自の世界観を展開した他の思想家との比較によって、より鮮明になるであろう。例えば、カール・シュミット（Carl Schmitt, 1888-1985）や、ヴァルター・ベンヤミン（Walter Benjamin, 1892-1940）といった思想家との比較は重要となるであろうが、これは今後の課題としたい。



## 参考文献

### 一次文献

- Ernst Jünger, *Der Arbeiter*, Bd10, Klett-Cotta, 2010. (エルンスト・ユンガー『労働者』、川合全弘訳、月曜社、2013 年。)
- エルンスト・ユンガー『政治評論選』、川合全弘編訳、月曜社、2016 年。
- 『砂時計の書』、今村孝訳、講談社学術文庫、1990 年。
- 『大理石の断崖の上で』、相良守峯訳、岩波書店、1955 年。

### 二次文献

- David Pan, *The Sovereignty of the Individual in Ernst Jünger's The Worker, Telos: Critical Theory of the Contemporary*, 2008(144), pp. 66-74.
- Helmuth Kisel, *Ernst Jünger Die Biographie*, Pantheon, 2007.
- Karl Heinz Bohrer, *Die Ästhetik des Schreckens Die pessimistische Romantik und Ernst Jüngers Frühwerk*, Carl Hanser Verlag. 1978 .
- Matthias Schöning (Hg.), *Ernst Jünger-Handbuch. Leben-Werk-Wirkung*. Stuttgart, Weimar, 2014.
- Vincent Blok, *Ernst Jünger's Philosophy of Technology Heidegger and the Poetics of the Anthropocene*, Routledge, 2017.
- Wonseok Chung, *Ernst Jünger und Goethe Eine Untersuchung zu ihrer ästhetischen und literarischen Verwandtschaft*, Peter Lang, 2008.
- 石田圭子『美学から政治へ モダニズムの詩人とファシズム』、慶應義塾大学出版会、2013 年。
- 稲葉瑛志「前線兵士の沈黙と虚構の要請——第一次世界大戦における前線兵士の語りとエルンスト・ユンガーの『鋼鉄の嵐のなかで』——」、『文明構造論』、10 巻、2014 年、141 - 179 頁。
- 今井敦「ユンガー兄弟の技術論——「総動員／総流動化（die totale Mobilmachung）概念を軸として——」、日本独文学会編『ドイツ文学』、148 巻、2014 年、56 - 70 頁。
- 大貫敦子「『瞬間性』の美学」、『現代思想』、14 巻 11 月、1986 年、84 - 95 頁。
- 小野紀明『現象学と政治』、行人社、1994 年。
- 『美と政治』、岩波書店、1999 年。
- 蔭山宏『ワイマール文化とファシズム』、みすず書房、1986 年。
- 『崩壊の経験』、慶應義塾大学出版会、2013 年。
- カッシーラー『啓蒙主義の哲学』、中野好之訳、ちくま学芸文庫、2003 年。
- 川野正嗣「エルンスト・ユンガー『労働者』における『別の信仰』——戦士と信仰者の共同体——」、『社会システム研究』、21 巻、2018 年。

- ゲーテ『自然と象徴—自然科学論集—』、高橋義人編訳、前田富士男訳、富山房百科文庫、1982年。
- 『色彩論』、木村直司訳、ちくま学芸文庫、2001年。
- 古賀敬太・初宿正典編『カール・シュミットとその時代 シュミットをめぐる友・敵の座標』、風行社、1997年。
- 川合全弘『再統一ドイツのナショナリズム』、ミネルヴァ書房、2003年。
- 「ワイマール共和国期におけるエルンスト・ユンガーの政治思想（一）・（二）」、『法学叢書』、112巻6月・113巻1月、1983年、23 - 50頁・86 - 98頁。
- 「エルンスト・ユンガーの『労働者』——戦死者追悼論の視点から」、『世界問題研究所紀要』、28巻、2013年、227 - 240頁。
- クロコウ『決断 ユンガー、シュミット、ハイデガー』、高田珠樹訳、柏書房、1999年。
- 酒井潔・佐々木能章『ライブニッツを学ぶ人のために』、世界思想社、2009年。
- 高橋義人『形態と象徴 ゲーテと「緑の自然科学」』、岩波書店、1988年。
- 田野大典『魅惑する帝国 政治の美学化とナチズム』、名古屋大学出版会、2007年。
- ゾントハイマー『ワイマール共和国の政治思想』、河島幸夫・脇圭平訳、ミネルヴァ書房、1976年。
- ハイゼンベルク『部分と全体』、山崎和夫訳、みすず書房、1974年。
- 『科学 - 技術の未来 ゲーテ・自然・宇宙』、芦津丈夫編訳、人文書院、1998年。
- ハーフ『保守革命とモダニズム』、中村幹雄・谷口健治・姫岡とし子訳、岩波書店、2010年。
- フロイト『幻想の未来／文化への不満』、中山元訳、光文社古典新訳文庫、2007年。
- ポイカート『ワイマール共和国——古典的近代の危機』、小野清美・田村栄子・原田一美訳、名古屋大学出版会、1993年。
- 馬原潤二『エルンスト・カッシーラーの哲学と政治』、風行社、2011年。
- ライブニッツ『モナトロジー』谷川多佳子・岡部英男訳、岩波文庫、2019年。
- 脇圭平『知識人と政治』、岩波新書、1973年。